

# 小さな赤い花

小川未明

青空文庫



おそろしいがけの中なかほどの岩いわかげに、とこなつはなの花がぱつちりと、かわいらしい瞳ひとみのように咲さきはじめました。

花はなは、はじめてあたりを見みて驚おどろいたのであります。なぜなら、目めの前まえには、大海原おおうなばらが開ひらけていて、すぐはるか下したには、波なみが、打ち寄よせて、白しろく砕くだけていたからであります。

「なんとというおそろしいところだ。どうしてこんなところに生うまれてきたろう。」と、小ちいさな赤あかい花はなは、自じ分ぶんの運うん命めいをのろいまました。それはちようど、寒さむい雪ゆきの降ふる国くにに生うまれたものが、暖あたかたな、いつも春はるのような気き候こうの国くにに生うまれなかつたことを悔くい、貧び乏ぼうな家いえに生うまれたものが、金持かねもちの家いえに生うまれて出でなかつたこ

とをのろうようなものがあります。

けれど、それはしかたがないことでありました。とこなつのはなは、そこに生おいたたなければならぬのでした。花はなは、ものこそたがいにいい交かわしはしなかつたが、自じ分の周まわりにも、ほかの高たかい木きや、低ひくい木きや、またいろいろな草くさが、やはり自じ分ぶんたちの運うん命めいに甘あまんじて黙だまっているのを見みますと、いつしか、自じ分ぶんもあきらめなければならぬことを知しつたのであります。

天てん氣きのいい日ひには、海うみの上うへが鏡かがみのようひかに光ひかりました。そして、そこは、がけの南みなみに面めんして、日ひがよく当あたりましたから、花はなは物もの憂ういのどかな日ひを送おくることができましたが、なにしろ、がけの中なかほどで、ことにほかには美うつくしい花はなも咲さいていませんでした

から、みつばちもやってこず、ちようもたずねてきてくれませんので、寂さびしくてならなかつたのであります。

花はなは、海うみの方ほうから吹ふいてくる風かぜに、そのうすい花はな弁びらを震ふるわせながら、自分じぶんの身みの不幸ふこうを悲かなしんでいました。

ある日ひのことであります。一いびきの羽はねの美うつくしいこちようが、ひらひらと、どうしたことかその辺へんへ飛とんできました。そして、そこに、赤あかいとこなつはなの花さきの咲みいているのを見みつけると、さつそく、花はなの上うえに飛とんできました。

「まあ、珍めづらしく、かわいらしい花はなが、こんなところに咲さきいていること。」と、ちようはいいました。

これを聞ききつけた、とこなつはなの花はなは、ちようを見み上あげて、

「よくきてくださいました。私は、毎日ここで寂しい日を送っていました。そして明け暮れ、あなたや、みつばちのおたずねくださるのを、どんなにか待つていましたのであります。けれど、今日まで、だれも、たずねてはくれませんでした。ほんとうに、ようこそきてくださいました。」と、花はちように話しかけました。

すると、ちようは、小さな頭をかしげながら、

「じつは、私は、こんなところに、あなたのようない花が咲いているとは知らなかつたのです。今日、路を迷つて、偶然ここにきまして、あなたを知つたようなわけです。それにしても、なんと、あなたは、やさしく、美しい姿でしょう。」と、こちよ

うはいいました。

「あなたが、路みちをお迷まよいなされたことは、私わたしにとつてこのうえな  
いしあわせでした。私わたしは、まだ世よの中なかのことを知しりません。どう  
か、私わたしたち仲間なかまが、どんな生せい活かつをしているか、私わたしに聞きかせてく  
ださい。」と、花はなは、ちように頼たのんだのであります。

可憐かれんなとこなつの花はなは、ほかの花はなたちの生せい活かつが知しりたかつた  
のです。そして、自じ分ぶんの運うん命めいを比ひ較かくしてみたいと思おもつたのです。  
花はなにこういつて聞きかれたので、ちようは答こたえました。

「そういわれれば、わたしは正しょう直じきに答こたえますが、あなたは、  
ほんとうに不ふしあわせな方かたです。あなたがたの仲なか間まは、広ひろ々びろと  
した野原のほらに、自じ由ゆうにはびこつて、いまごろは、赤あか・青あお・黄き・むらさき  
・紫むらさき・

白しろというふうふうに、いろいろな花はなが咲さき誇ほこつて、朝あさから晩ばんまで、ちようや、はちがその上うへを飛とびまわつて、それはどんなにぎやかなことでありましょう。「といいました。

「まあ。」といつて、とこなつはなの花はなは、ため息いきをもらしました。

やがて、ちようは別わかれを告つげました。その後あとで、花はなはいつまでも深ふかく悲かなしみに沈しずんでいました。

あくる日ひも、夜よが明あけると、花はなは、うすい花はな弁びらを海うみの方ほうから吹ふいてくる風かぜにそよがせながら憂うれえていました。

そのとき一羽わの名なも知しらない小鳥ことりが、そばの木立こだちにきてとまつて、花はなを見みおろしながら、

「おまえがいちばんしあわせ者ものだ。そんなに悲かなしむものじやない



。「と、花はなにいつて、どこへか飛とび去さつてしまつたのです。

とこなつはなの花は、小鳥ことりのいつたことが、ただ自分じぶんを哀あわれに思おもつてなぐさめてくれる言葉ことばだと思おもひませんでした。その後のちも、花はなは、さびしい日ひを送おくつてきました。

日ひの光ひかりは、だんだん南みなみの方ほうへ遠とおざかりました。そして、海うみの上うへから吹ふいてくる風かぜが寒さむくなりました。しかし、そこは、うしろの北きたには山やまをしょつていました。ほかから見みれば、ずっと暖あたたかでありました。それですから、とこなつはなの花はなの葉はは、いつも青あお々あおとしていました。

ある朝あさのことです。太陽たいようが海うみから上あがつてまだ間まもない時じぶん分ぶんでありました。いつかのこちようが、昔むかしの面おも影かげもなく、

みじめなみすぼらしいふうをして、しよんぼりとたずねてきました。 両方の羽は、暴風にあつたとみえて疲れていました。

「どうなさったのですか？」と、とこなつの花は、びっくりしてたずねました。

「もういわんでください。昨夜の暴風で、花という花は、すっかりしぼんでしまい、私たちはみんな死んだり傷ついたりしました。私は、やっとここまで逃げてきました。どうぞ、しばらく休ませてください。」と、ちようは答えました。

その晩、この南の海に面したがけにも霜が降りたほど、寒かったです。あくる朝、花は目をさしますと、美しかったこちうは、傷ついたまま冷たくなって葉の上に気絶をしていました。

花はもどかしがりながら、早く太陽が照らすのを待っていていました。そのうちに、風が吹くと、ちようの体は、深いがけの下に転がり落ちてしまいました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「良友」

1921（大正10）年4月

※表題は底本では、「小《ちい》さな赤《あか》い花《はな》」  
となっております。

※初出時の表題は「小さい赤い花」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

2014年9月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 小さな赤い花

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>